



TITLE:

捻子と捻軍：清末農民戦争の一側面

AUTHOR(S):

小野, 信爾

CITATION:

小野, 信爾. 捻子と捻軍：清末農民戦争の一側面. 東洋史研究 1961, 20(1): 46-69

ISSUE DATE:

1961-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148206>

RIGHT:

捻子と捻軍

——清末農民戦争の一側面——

小 野 信 爾

- まえがき
一 捻子の登場
二 兩淮と私鹽
三 捻軍と宗族
むすび

まえがき

捻軍とは一八五三年（咸豐三）から六八年（同治七）にかけての一六年間、安徽・河南・江蘇・山東四省の交界一帯——いわゆる淮北地方を中心に反亂した農民軍であり、捻子とはその中核となった反體制的集團の稱である。その規模・内容・持續性のいずれからしても、清末農民戦争史上、きわめて異色の存在であるが、華やかな太平天國革命の蔭にかくれて、従前はほとんど注目されることなく、そ

の輪廓さえも明らかではなかった。

だが近年來、中國における關係資料の整理・出版事業の進行もあって、⁽¹⁾にわかに研究が進み、Chiang Hsiang-tse “Nien Rebellion” (1954)、江地「捻軍史初探」(一九五六)、同「初期捻軍史論叢」(一九五九)などの諸著作が相ついで發表されたが、とくに安徽史學通訊一九五六年第六期における「捻軍史特輯」⁽²⁾はまったく劃期的なものであったといわねばならぬ。これは安徽省科學研究所（當時）歴史研究室が、一九五七年・五八年の兩度にわたって行なった大規模な現地調査の成果を基礎に、同室近代史組が討論・執筆したものであり、これまで官製史料、官紳側記述にのみ據ることによって、ほとんど不可避的に生じた誤解・誤認を大幅に訂正するとともに、捻軍の實態究明への豊かな

手掛りを提出したものであった。蒐集した傳説・歌謠、古老からの聽書きなど現地調査のもつ強みを、決して切札扱いするのではなく、既存の文獻資料と慎重に照合・檢證して取捨する態度は、その秀れた研究體制とともに、まったく佩服のほかはない。

これら諸研究によつて、少くとも戰史としての捻軍史はかなり細部にわたるまで明らかにされたといえるが、捻子の性格・捻軍叛亂の評價については、私としては必ずしも賛同しかねる點がある。これは中國の研究者にほぼ共通

することだが、捻子や捻軍の農民革命的性の究明に力點がおかれるあまり、同時に内包する他の複雑な諸要因が往々無視あるいは輕視されているきらいがある。中國の歴史家と日本の我々とは當面する現實的課題に大きな違いがあり、私の不滿も當然そこに根ざしているわけであつて、捻軍叛亂を反清反封建の「轟々烈々の農民起義」と規定する點では基本的に一致しながら、あえてこの小論を草したのは、捻子・捻軍の複雑な性格、その内部矛盾、弱點をも明らかにし、その克服の契機を究明してみたいからにほかならぬ。以下、前述の「捻軍史特輯」の新成果の

紹介もかねて、私なりの見解を述べさせていただくこととする。

- (1) 中國近代史資料叢刊「捻軍」六冊（一九五三）、「捻軍史料叢刊」第一集（一九五七）、第二集（同）、第三集（一九五八）、「捻軍資料別集」（同）など。
- (2) 「捻軍產生的社會背景」肖柳撰稿、「捻軍的產生及其初期的活動」馬昌華撰稿、「關於捻軍的組織問題」張珊撰稿、「和羅爾綱先生商榷捻軍戰術問題」張珊、「張樂行傳」若木撰稿の五篇よりなる。總論としての「安徽捻軍概述」張珊は前號の第四・五期合刊に掲載されている。なお以後引用の場合は各篇の表題のみ掲げることとする。
- (3) 安徽史學通訊一九五八年第五期「捻軍調查計劃和提綱」參照

一 捻子の登場

「捻子」という呼び名が初めて文獻に現われるのは一八一四年（嘉慶一九）、御史陶澍の上奏においてであるが、翌一五年には「河南・安徽邊界の紅鬚・捻匪は四川國匪の例に照して加重治罪する」という新例が公布され、にわか
に脚光を浴びることになった。もちろん捻子の存在自體はそれ
に先行していたわけであるが、陶澍が「匪徒は此れより前
は猶お散じいたるも今は則ち聚まれり。……此れより

前は黨ありしも今は則ち（頭）目あり。……此れより前は猶お官を畏れおりしも近ごろは官反^{かん}つて退縮せり、査するに此等の匪徒は、皆、十年前の地方官の因循貽誤せるに因って後患を養成せるなり……。と指摘しているように、嘉慶年間に入って急速に擡頭してきたものと考えられる。

ところで、この陶澍の上奏は「條陳緝捕皖豫等省紅鬍匪徒摺子」⁽⁵⁾なる表題の示すように、實は安徽の廬州・鳳陽・潁州各府、河南の南陽・汝寧・陳州各府および光州などで、「群を成し隊を結び、白晝横行」している「紅鬍子」なる「匪徒」について報告したものであり、その中で「每一股を一捻子と謂い、小捻子は數人・數十人、大捻子は一・二百人不等」と説明しているのである。紅鬍と捻子を直結したのは後で述べるように彼の誤認だが「捻」を集團^{グループ}の呼稱としたのは正確であつた。「捻」は安徽・河南交界地方一帯の方言で、股・伙・鋪と同義である。安徽北部の渦陽・蒙城・亳縣一帯では、（組、仲間などを數える量詞たる）一股子・一夥兒を慣用的には一捻子・一鋪（Pū）子という⁽⁶⁾からである。史料上、たとえば湘軍志・湘軍記、さらには捻軍の故地たる渦陽縣志さえもが、「捻」を「捻紙燃

脂」——脂を滲ませた紙捻^{てん}に由來するものとして、捻子盜賊説あるいは宗教結社説を正當化しようとしているが、臆説・誣説と斷定して差支えない。

また紅鬍子というのは、周知のように華北では馬賊のことであり、この地方では土匪・強盜の通稱である。陶澍もこれを惡逆無道の匪賊として、その罪狀を列擧しているが、前記の新例自體が紅鬍と捻匪を並記して區別しているし、同時に出された上諭でも「豫省汝・光一帯の紅鬍・捻子手等」と書きわけている⁽⁷⁾。

これらについては、同時代人であり、實際に捻子の活動を目撃したこともある河南固始の人蔣湘南が「捻子、紅鬍は乃ち詛咒なり。」と述べ、「良民これを罵りて紅鬍子と曰う」と記しているのが参考となろう。捻子は往々紅鬍子と惡罵されていたが、決して紅鬍と捻という等式が成立するわけではなかった。それは捻子の性格について考察する中で、自ずから明らかにされるであらう。

- (4) 十朝聖訓仁宗卷一〇一嘉慶二〇年八月壬戌條。
 (5) 陶文毅公全集二四、捻軍資料別集（以下別集と略稱）にも收録。

- (6) 捻軍的產生及其初期的活動。

(7) 同注(4)

(8) 蔣子瀟先生遺集、春暉閣詩鈔選六「捻子」(捻軍第一冊三二

五頁)

それでは捻子とは一體どんなものだったのか。捻軍叛亂後の惡意に満ちた記載や官府の資料は避けて、公平なる第三者というわけにも行くまいが、一個の讀書人たる前出の蔣湘南の記述を引用してみよう。

「江淮の間に所謂捻子なる者あり、數百人一群となり、擡礮・鳥銃・刀矛など各殺人の器皆具え、蟻擁蜂轉するも地方官敢て誰何する莫し。余嘗て其の魁を視たるに下中人なるのみ。而も所在門に關るもの呼びて『響老』と曰う。響老なる者は、人に不平の事あれば輒ちこれが平をなす。久しうして赴き懇うる者衆く、贊口洋溢し遠近に轟くこと風鼓雷鳴の如ければ、則ち響捻子と成るなり。」どうして縣官(父母官)に訴えずに、捻子にばかりたよるのかと士民に尋ねると、官衙には錢がなければ訴えもできず、しかも理非曲直が立つとはかぎらぬ。裁判沙汰の諸掛りで破産の憂目もめずらしくはない。「何ぞ諸を響老に懇うれば、一錢も費さずして曲直立ちどころに判じ、弱者伸び强者抑

えらるること、即ち一日の間に在るに如かんや」との返答。「余ここに於いて喟然として曰く、捻子は其れ漢代の游侠か。……難を聞けば排し、紛を見れば解き、其の身を顧りみず以て人の急に殉ず、……然うして諾を重んじ義を市るの後、無業の者これに投じ、亡命者これに投じ、販鹽・掘塚・博掩の者これに投じ、……公に背き黨に死して、爲す可からざる無し。古より俠魁は罪魁たらざる者あらざるなり。」(讀漢書游侠傳)

蔣湘南は、他に捻子同志の械鬪の作法や、彼が實際に目撃した、捻徒が貧乏老秀才に非常な敬意を拂っていた話などを紹介しているが、叛亂以前の捻子の實相として、この現地の讀書人の證言は一應信頼出來そうである。また前出の捻子取締り強化の新例と前後して、捻子の本場、潁州府で出された告示の中では「一種の専ら罪人を匿い、私鹽を包送し、官捕を抗拒するもの、これを礮子(礮と捻とは同音)と謂う」「桀黠の徒、自ら雄長なるを矜り、遂に私鹽を包送し、亡命を窩留し、捻頭と號稱す。衆を聚め劫殺するを以て威風を張り、尋仇報復をば義氣となす」と捻子・捻頭を規定している事實をも考慮する必要がある。同じ官

府の文書でも、直接人民に戒告する告示の類では、あまり實態とかけ離れすぎた規定では全く逆効果だからである。

ここで私なりにその性格を規定するとすれば、捻子とは一種の俠客團體であり、捻頭はいわば親分に當るということになる。「捻」という呼稱自體、日本流に言えば、××組、あるいは○○一家という組または一家を指す言葉から來ているのである。その内容は水滸の世界を彷彿させるものがあり、事實「水滸宋江の爲人を慕^{ひもと}つて、群盜と交通した」ある富家の子弟さえ飛出している。⁴⁴「行俠尚義」を看板にした俠客團體、「重諾市義」の男伊達の下に、梁山泊の如く、鹽密賣買者も博徒も盜賊も庇護を求めて投じたわけで、決して捻子自體が闇鹽業者、博徒、盜賊であったのではなかったのである。

- (9) 蔣子瀟先生遺集、七經樓文鈔三（捻軍第一冊三二三頁）
- (10) 左輔、念宛齋集官書三「潁州府條示」（別集二二三頁）
- (11) 同上「禁行擾害示」（別集二五頁）
- (12) 傅懷祖、灌園未定稿「蘭山縣黃公治盜紀略」（別集四五頁）

このような性格の捻子には、おそらく明確な起源などはなかったと思われる。江地の研究によって明らかかなように、白晝、御法度を犯して、一刀をひっさげ、群をなし

て村や街を練り歩く威勢のいい連中は、「順刀會」「拽刀會」「掖刀會」などの名稱で、すでに乾隆ごろ（一八世紀中葉）から文獻に出没しており、かかる「無頼の徒」の活動が嘉慶以降にわかに活潑化した結果、いつしか捻子という呼稱が定着していったのだとも考えられる。その武装も嘉慶・道光ともなれば、擡鎗（大型の火繩銃）、鳥銃と火器まで備えて、もはや「順刀」とか「拽刀」とかでは、包括し得なくなっていたからである。

嘉慶といえば誰しも想起するのが、一七九六年（嘉慶元）から一八〇四年（嘉慶九）にかけての四川・湖北・陝西を中心に爆發した白蓮教の叛亂であろう。兩淮地方は元末の白蓮教叛亂の故地でもあり、湖北とは直接地を接しているのだから、捻子の發生とそれを結びつける考え方が生まれるのも自然である。陶澍も「紅鬚は原と白蓮教漏網の人に係る」と云い、⁴⁵黄鈞宰も「金壺七墨」の中で「白蓮遺黨」とする説をとっており、これを承けた江地は「捻黨は白蓮教の變種であり、白蓮教と密切な歴史的淵源をもっている」と斷言さえしている。⁴⁶だが同時に、彼は「捻黨は宗教組織ではなく、迷信的要素をもたぬ」と矛盾した見解をも述べ

ているが、調査結果によれば、捻子は白蓮教と無關係なばかりか、逆に對立・抗争の關係にあった。

もちろん間接的な關係がないわけではない。馬杏逸はその

「捻逆述略」の中で、「捻は嘉慶二年に起る。楚川に教匪滋擾し、在處に鄉勇を招募す。其時、穎・汝歲歎く、應募せる者衆し。數年にして教匪底定し、勇を撤して籍に歸らしむ。若輩は久しく戒行を歴し、桀驁性と成り、剽掠性と成る。既に歸るも生業を屑とせず、唯博飲を事とし、地方の無頼また従つてこれに附和す。……賊の強悍にして富める者、自ら首領となり、衆を糾めて横行す。集市にて聚り賭し、刀矛鎗銃を排列して名ずけて鎮棚と爲し、衆稱して棹主（捻首）と爲す。各集市皆然り。……」と述べているが、鄉勇くずれが舊來からあつた游俠無頼の風を一層助長し、重大な社會的・政治的問題にまで發展させたことは、一應考えられることであらう。

- (13) 江地、初期捻軍史論叢（以下論叢と略す）二一七頁。
- (14) 前引「條陳緝捕皖豫等省紅鬚匪徒摺子」
- (15) 金壺七墨・浪墨四「捻匪初起」（捻軍第一冊三七七頁）
- (16) 江地、論叢七一三頁。
- (17) 江地、論叢一八一二〇頁

- (18) 捻軍の產生及其初期的活動、江地の論據を一々否定し、捻軍と白蓮教徒との間に鬭争のあつた事實をも舉げてゐるが、紙幅の都合で詳しい紹介のできぬのは残念である。

- (19) 方玉瀾、星烈日記彙要三二「賊情一九」所引。（捻軍第一冊三〇九—三一三頁）

捻子がこのような自然發生的な俠客團體である以上、相互の間に何らの統一もなく、各地に無數の捻頭が亂立して互いにしのぎをけずるようになったのも當然であつた。もともと兩淮地方は、一村一姓、數村一姓といった同族部落が多く、後進的宗族遺制を背景に械鬭の盛んな地域であり、「民風強悍にして事に遇いて忿争すれば、往々多人を號召し、械を持つて格鬭す」と云われ、民間には禁制の火器・刀矛の類が多く私藏されていたが、捻子の擡頭はさらにこの風潮に拍車をかける。というよりも、一般の械鬭の風潮が捻子を産み出したと見る方がより正確かも知れない。「一莊に捻あれば一莊安んじ、一族に捻あれば一族幸なり」と云われ、他捻の壓迫を避けるため、莊や族中に一寸でも「強悍なる者」があると、みなで懲慥し、資糧を援助して「結捻」させたという。また械鬭に備えて、特殊な技倆を持つ連中を高賃金で雇い入れることもあつたらしく、捻子

に關する記述には凄慘な械闘・打降^{げんか}の記事がつきものとなつていたのである。だから捻子の主流は、「該匪徒等（紅鬚・捻子手）は、販私（鹽の密賣買）・肆掠（掠奪）の時に當つては、自から多人を聚集し、肆いままに不法を行うも、其の平時に至つては、仍お村落に散處し、自ら齊民に附す」と嘉慶二〇年の上諭が述べているように、在地性の強いものであり、決して鄉村から遊離したルンペン團體ではなかった。もちろん「邪匪（白蓮教徒）の夥黨を勾結して亂を倡うる者の如きの比すべきに非ず」と清朝自體が認めているように反清朝的性格は本來持合せていなかったのである。

だが一方では、「名姓を知らざる類、數十人を聚めて到處游行し、隙に遇えば便ち搶^{かづらひ}する」游捻または飛捻と呼ばれるものもあり、この場合はむしろルンペンの性格が強かったと思われる。その他、渦河の波止場人足の捻などの事例もあるが、これらは捻子としてはむしろ傍系に屬したものである。種々の史料例から考えると、捻子、ことにその首領である捻頭は、官府文書の中で「土棍」「光棍」「土豪」と普通呼び慣わされている連中が主流を占め

ていたと判斷される。

現地調査で採集された傳説によつても、捻軍の首領級の大部分は「光棍」であり、それも「仁義光棍」と「五狼光棍」の二種あつた。前者はつまり響老、響捻子のな「行俠尚義」の看板通りの男伊達であり、後者はその逆に弱い者いじめ専門の惡親分というわけだが、光棍相互間には「爭光棍」と呼ぶ縄張り争いが絶えなかつたという。この「爭光棍」を通じて、各捻子の間に統屬關係の生ずるのも自然の成行きであり、「大捻」の支配下におかれた「小捻」は「幫捻」と稱された。各捻頭は地域・地域に割據して勢力を張り、縣や府の衙門の胥吏や捕役さえも抱き込み、地方官さえ、うっかり手をつけられぬ状態となつていたのである。

(20) 十朝聖訓宣宗八三道光一四年三月壬申條。火繩銃など各種の武器は、民間の鐵鋪で製造されていた。

(21) 方玉瀾、前掲書。

(22) 十朝聖訓仁宗一〇一嘉慶二〇年八月壬戌條。

(23) 方玉瀾前掲書。

(24) 捻軍黑旗の首領劉狗・劉尿兄弟の例。（捻軍の產生及其初期的活動第二章）

(25) 例えは十朝聖訓宣宗八〇道光二年九月乙亥條。同八二道光一

〇年二月丁卯條、同八三道光一二年九月庚戌條などを見よ。

(26) 捻軍の產生及其初期的活動第三章

(27) 方玉瀾前掲書。

(28) 縣衙の胥役・捕役が捻と通謀し、効果的取締の出來ぬことを指摘した資料は無數にある。

二 兩淮と私鹽

もちろん、嘉慶年間に入ってから捻子の急激な勢力擴大の背景には、それなりの政治的・社會的・經濟的原因があった筈である。「我此の邦（河南省南陽・汝寧・光州一帯）に生れ、頗る其の犄^{はら}所を知る。地は本瘠^{もと}せて貧しく、人また蠹^{おろか}にして秀ならず。博進して生涯を爲し、私鹽にて販售を轉ず。……恒産自來無ければ恒心何處にか返^{やど}らん。」と蔣湘南は歎き、査揆は嘉慶二〇年頃の作と推定される「論安徽吏治一」の中で、「夫れ民人は耕耨を以て耕生を爲し、彼（捻子）は即ち盜賊・光棍・私販を以て耕耨と爲す。今、官をして日に耕耨する者を捕えてこれを殺さしむるも、民殺によって耕耨を廢する能わざるは必然なり。然らば彼の盜賊・光棍・私販を以て耕耨と爲す者、能

く殺によって遂に盜賊・光棍・私販を爲さざらんや。且つ夫れ凶荒前にあり、鼎鑊後に在れば、其の凶荒に當つては鼎鑊あるを知らざるなり。此の輩の法を冒して以て死する者、盡くは凶荒に由らざるも、凶荒に由つて以て此に馴致せるが十の八・九、……其の故習を去り、法を畏れ死を慙^{あは}ましめんとするも、男に耕す可き無く、女に織る可き無し、赤身捫腹、疊然として甘んじて餓殍と爲るも敢て動かざらしむるは、また勢いの必ずしも然らざる所の者なり。」と政治の無力をかこっている。捻子横行の社會的・經濟的背景を的確につかんだものといえるであらう。

元來、地理的に見ても明らかのように、捻亂の中心地域——淮北は主要交通路線から外れた後進地帯であり、農業以外に生計の道はほとんど考えられなかった。しかもその農業も棉花・麻など商業性の高い作物には恵まれず、大小麥・豆類を主としたものであつて、その生産力は極度に低く、自然的災害もあつて非常に不安定であつた。査揆はこれについて、「（先進地帯である）江浙にては田業無き者も、皆務むる所あり。……游民ありと雖も害を爲すに足らず。獨り淮泗の間は物産瘠少にして販易通ぜず、逐末^{しやうば}の

利も其の術を知る罕し。是において工商せずして婦女を販
し鹽硝を鬻ぎ、百藝せずして開場して博徒を聚め、甚しき
は乃ち教（白蓮教）を習い鳩集して不軌を爲す」と述べて
いる。だがこれは生産力が停滞し、商品經濟の發展が阻まれ
ている限り、不變の條件であつて、嘉慶以後の捻子登場の説
明にはなりかねる。なぜこの時點において、「無業の民」「游
民」の存在がとくにクローズ・アップされたのか、解答は
清朝支配體制の全般的危機の中に求められねばならない。

(20) 蔣子瀟先生遺集、春暉閣詞鈔選六「捻子」（捻軍第一冊三二
五頁）

(30) 質谷詩文鈔九（別集二九—三〇頁）

(31) 同上「論安徽吏治三」（別集三一頁）

清朝もそれ以前の各王朝と同様に、初期の農業生産の復
興・發展を基軸とする諸施策を基礎に政權を安定させ、や
がて康熙・雍正・乾隆の最盛期をむかえたが、間もなく商
業資本による農村經濟の侵蝕、國家支出の増大と官僚の腐
敗による農民收奪の強化、農業生産維持の保障たる諸施策
——ことに水利の廢弛による生産力の減退、小農民の没落
によって、自らの基礎を掘り崩し、體制全體の危機を招來す
るという法則的な推移を辿る。さらに加えて歐米資本主義

の壓迫・侵略が、新たな要因として出現したことはいうま
でもない。最初の大規模な農民戰爭——白蓮教の叛亂に、そ
の馬脚を露わしながら、やっとこれを鎮壓して一息をつい
た清朝は、中興を自贊する暇もなしに、深刻な矛盾の繼起
に直面しなければならなかった。すなわち阿片の流入、銀の
流出による經濟的バランスの崩潰、社會不安の増大である。

河北の一例によると、嘉慶初年、銀一兩につき銅錢一、
〇〇〇〇九〇〇文であつた銀錢比價は、年とともに増大し、
太平天國革命の勃發した一八五〇年頃には、實に二、三〇
〇文前後、一八二一年（道光元）を一〇〇とすれば、一八
〇〇年から〇九年の間、最高八四・五、最低七二・六を上
下していた比價が、一四年頃（嘉慶二〇）を境にしてにわ
かに上昇に轉じ、三〇年間餘りの間に一八〇臺まで、實に
二倍半に近い値上りを示している。この間、錢建値の農產
物小賣物價指數は、八〇から一一〇臺とほぼ横ばい、手工
業生産物も同様であつたから、銀相場の高騰は生産物を錢
で賣り、銀に兩替して納税する小農民にとって、直接の増税
を意味したことはもちろんである。官僚・胥役の中間搾取、
兩替商人の相場操作、地主・豪紳による負擔轉嫁等々は、

さらに何倍かの苛斂・誅求として結果し、加うるに人災たる自然災害の頻發もあって、清末農民戦争の大爆發を必至ならしめるのである。

わが捻軍の最大據點となった雉河集一帯（現在の渦陽縣、當時潁州府屬の亳州・阜陽・蒙城および鳳陽府屬の宿州の四州縣の交界一帯）に、その具體的状況をさぐってみよう。ここでは何よりも、水利の荒廢・治水の放置が重大な結果を引起した。安徽北部一帯は大平原であり、西北から東南に流れて淮河に注ぐ河川が無數にあったが、捻軍叛亂前には渦河を除いたほとんどの河川は河道が埋まり、水はけが悪くなっていた。しかも一帯が砂礫地で表土が淺く、蓄水力に乏しいという條件もあって、ちよつと雨が續けば洪水、日照れば旱害となり、「三年兩頭災、十年八年災」の諺まであったという。雉河集の北を流れる鴻溝という川は、捻亂前には、たった五尺幅の文字通りの溝に變りはてたし、同じく北淝河は、鹽・宿を貫流する相當大きな河であったのが、全く埋もれてしまい、やつと一八九八年（光緒二四）になって五尺幅の溝をつけ直した。單に河床が上ったとか、せばまったという程度を越えて、多くの

河川が基本的には消滅しさえしていたのである。それだけではない、當時まだ江蘇省北部で海に注いでいた黄河が、一八四一年（道光二一）、四三年、四四年と三回にわたって河南で決潰したおりには、そのたびに洪水が淮北を洗って淮河に出、廣汎な飢饉を置土産にしていたのである。

⑧ 嚴中平等篇、中國近代經濟史統計資料選輯三七、三八頁。

⑨ 捻軍產生的社會背景第四章。

これに前述の銀高と苛斂誅求が加わる。後進的な淮北地方では、商品經濟の未發達から、直接納稅者は銅錢で納付し、官側がこれをたとえば河南の周家口など、かなり遠方の商業中心地まで輸送して銀に換えていたが、運搬費・兩替諸掛りの加算は當然としても、機構の複雑さに應じて中間搾取の額も増した。またこの地方では、課稅基準たる畝の大きさが一定せず、實質上の稅負擔の差が七〇倍に達するものがあつたといひ、地主・豪紳のこれを利した脫稅行為は、ことに鳳陽府屬で甚しかったといふ。これらすべての負擔は小農民におしかぶされ、階級分化は急速に進行していったのである。

現地調査での推定によると、捻亂前夜、張樂行の出身村、

張老家では、總戸數六九戸中、所有地二九畝以下の貧農・小作農は三九戸、三〇〇九九畝の自作農が一五戸、一〇〇〇七〇〇畝の地主が一五戸であり、總戸數の五六%を占める貧農・小作農は耕地面積のわずか一・五%しか占めていなかった。⁽³³⁾ しかも提示されている資料を検討すると、その三九戸中、三五戸——總戸數の五〇%強は、全く土地を持っていなかったのである。これを隣りの宿縣(宿州)で的一九〇五年の數値⁽³⁴⁾、半自作農二二・六%、小作農一七・九%と比較すれば、その農民層分解がどれほど深刻であつたか、おのずから明らかであろう。

もともと安徽省北部は農業生産力の低さから、自作農の比率の高い地方であり、一九三五年の調査統計⁽³⁵⁾では、鳳臺・亳・阜陽三縣の平均數値として、地主三・五五%、自作七一・五八%、自小作九・五七%、小作一四・二五%、雇農〇・八%があがっている。他方、捻亂當時、亳・蒙・宿一帶の小作では、「拉鞭地」または「把牛地」と呼ばれるもの——農民の所有物は牛追い用の鞭だけで、農具・家畜・種子・住居等一切を地主の貸與に仰ぐ形式と、「賠牛地」と稱する地主から耕牛購入費の貸與(無利子)をうけ、小

作契約解消の際にはその返済が條件となる形式——實質上の土地緊縛——との二種が最も普遍的であり、小作料は前者で六〇〇七〇%、後者では五〇〇六〇%に達したという。⁽³⁶⁾ 土地の生産性の低さが、小作經營の成立をよほど條件のよい土地だけに限つたことが、淮北における地主制の發達を阻んだ主要條件であつたことを考慮すれば、この深刻な事態は、多くの農民を生命の維持すら困難な境遇に追込むものであつたといえよう。

だが彼等は食えないと云つても離村するわけにはいかない。中國全土が程度の差はあつてもほぼ同様の状態であつたから、農民は當面を糊塗するために耕地を手放しても、やはり土地にしがみつくほかはなく、生きるためには、他に何らかの副業を求めねばならなかつた。それが、この地方においては、私鹽⁽³⁷⁾の密賣買(私販)であり、彼等は正しく「生きるための闘い」を、清朝專制支配體制に向つて挑むことになつたのである。

(34)、(35) 捻軍產生的社會背景第一章。

(36) 中國近代經濟史統計資料選輯二七六頁。この數字は捻亂前の宿州での農民分解が、雉河集より低かつたことを意味しない。私は矛盾が農民戰爭の形で爆發したあと土地關係の自律

的調整が行なわれていたと考えている。

(87) 郭漢鳴・洪瑞堅、安徽省之土地分配與租佃制度一九頁。

(88) 同註(84)、(85)。他に一種の勞役地代の殘存形式である「戸下」

——地主から四・五畝の土地を貰う代償として、代々地主の保鏢を努め、雜役に從事する義務を負う——がある。「戸下」は人格的には賤視されており、皖南の世僕・伴當などの賤民は案外これと關係があるかも知れぬ。なお「戸下」を持つのは比較的大きな地主に限られた。その他、「課地」という定額地代制もまれには存在していたという。

鹽の專賣益金を國庫收入の重要財源としたのは中國專制支配體制の特色であるが、清朝もこれを踏襲し、歲入の三〇—四〇％に及ぶ鹽課を鹽商から取立て、獨占販賣權をこれに附與して嚴重な統制を行なっていた。關値が公定より廉く、かつ良質であるという私鹽は、この惡税の下で始めて可能となり、人民大衆の支持をうけて、絶えず、清朝の鹽政を脅やかし、彈壓・取締りと奔命に疲れさせたのだが、この點では淮北一帯は絶好の條件に恵まれていた。

地圖を見れば明らかなように、山東・江蘇・安徽・河南の各省境が犬牙錯綜し、各行政當局が互いに責任を轉嫁し合い、國家權力による統制が最も及び難い、俗に「兩不管」「三不管」と呼ばれる地域であった。⁽⁸⁹⁾ しかもこの地方は同

時に、長蘆・山東・淮北三鹽の行鹽地(獨占販賣地域)の交錯する鹽法上の不管地でもあり、加うるに山東・長蘆二鹽が淮北鹽に比べて遙かに低廉だったという特殊事情を以つてすれば、私鹽密賣が盛行しない方が不思議である。⁽⁹⁰⁾

捻亂以前、安徽北部各縣の中ただ一つ蘆鹽區に屬していた宿州は、毎年、定額二〇、八九三引の鹽を賣り、他に餘引(餘鹽)まで引受けてさばいていた。反對に隣りの亳州は、清初の定額五、〇三三引を、一七七九年(乾隆四四)二、〇〇〇引に減じており、潁州府六州縣(阜陽・蒙城・亳州・太和・潁上・霍邱)の割當額合計さえ二四、二一六引で、やっと宿州一州にしか匹敵しなかったが、それでも「鹽を積んで售れず、商に阻勒の苦あり、民に追比の患あり」といった有様であった。⁽⁹¹⁾ ここでだけでなく、淮鹽區の安徽一四州縣(淮北全部)と河南八州縣は官鹽の消化が皆無に近く、種々の彌縫策も何らの効果も收めぬ不良地區として問題となり、ついに一八三二年(道光一二)、陶澍による大改革——票鹽法の施行を見るにいたるのだが、基本的な事情は少しも改善されなかった。

捻子が私鹽密賣に關係していたことは、前引の諸資料

に頻出するところであるが、これについて陶澍は、一八一四年の上奏で、捻子抑壓のためには淮北鹽の價格を引下げ、外にないことを主張しつつ、こう述べている。⁽⁴²⁾

「安省の額・毫、豫省の汝・光一帯は例として淮鹽を食み、現在毎斤の値錢は四・五十文不等なり。長蘆の私鹽は毎斤半價に及ばず。ことを以て居民は私鹽を利食す。其の間、私販・鹽梟實に繁く、徒をもち、紅鬚（捻子）これが護送をなす。毎車の私鹽に錢二百文を索め、毎月私鹽は百輛に啻ならず。賭博・酒肉の貨は皆此より出ず。鹽車足らざれば乃ち出でて劫搶す。」

つまり捻子は私鹽の「包送」（護送請負）を、その經濟的基盤としていたのである。張樂行の場合を見ると、雉河集一帯はすぐ北の鴻溝（治水放棄のため當時五尺幅の小溝と化していた）を隔てて、蘆鹽區たる宿州に接するという好條件に恵まれ、多くの農民は農閑期に大舉して、私鹽商賣に出かけていた。大運河沿いの大がかりな鹽の闇商人組織と違つて、こちらでは片手間の「かつぎ屋」的商賣が可能だったわけで、前述の黃河連續決潰による洪水の後、これに参加する農民がにわかに増えたという。もちろん清

朝側がこれを放任するわけはなく、宿州および河南の永城縣と亳州・蒙城との長い境界線沿いに、私鹽密賣買者と「鹽巡」（私鹽Gメン）との死闘がくりかえされた。

張樂行は「鹽趙主」（宰領）として「十八打手」（火繩銃の操作に熟達し十八槍手とも呼ばれる一八人の手下、日本流に言えば一八人衆か）を率い、私鹽キャラバンの護送に當り、その護送費は太平車（四輪牛車で鹽二〇〇三〇包を積む）一臺につき、鹽一包だったという。彼の捻子の勢力の増大につれて、その保護に依存する私鹽集團はますます多くなり、鹽巡も三舍を避けたため、ついには鹽車に彼の「義褲腿」（？）をかかげるだけで、堂々と通行できるようになり、なかには無斷で彼の名義を借用するものさえ現われたのである。⁽⁴³⁾

(39) 陶澍前掲摺に「匪徒往來無定、此輩彼窺、其聚處多在隣省交界及各州縣接壤之所。此等處所名爲三不管。每有失事案件、地方官輒互相推諉、以圖免處分」

(40) 佐伯富、清代鹽政の研究一一六―一二七頁參照。

(41) 捻軍產生的社會背景、宿州志、亳縣志、潁州府志を引いている。

(42) 佐伯前掲書三二九―三九四頁參照。なおこの二二州縣の外、湖運の他の一一州縣（主として淮南）も相當の鹽政疲弊地區

であるが、捻子の分布の南限がこれにはば一致する——江運の合肥が加わる——のは興味深い事實である。

(43) 陶澍前掲摺。

(44) 捻軍產生的社會背景および張樂行傳、なお張樂行の捻には後に五〇打手、一〇〇打手の傳説があり、その勢力擴大を示している。

ところが、捻子と私鹽との關係をめぐって、これと全く相反する史料の存在することも注意しなければならない。

十朝聖訓宣宗八二道光一〇年（一八三〇）二月丁卯條によると、長蘆・山東鹽區の河南の陳州・歸德兩府と、これに隣接しながら淮鹽區に屬する汝寧府・光州との間では鹽價の差から往復數日で倍利を博し得るため、歸德の鹿邑縣、陳州の項城縣などで鹽を買込んだ密賣者達の「或は驢を以て駄し、或は車を以て運び、毎起數十人より二・三百人不等に至る」武裝キヤラバンが、堂々と晝夜南行するほど私鹽が盛んだったが、同時に「過る所の州縣に、又本地の土棍あり、每一頭目が夥匪多人を率領し、各地界を分ち途に沿て守候し、私鹽經過すれば勒して械鬪を成す」強敵にぶつつかっていたのである。

査揆も前に引いた「論安徽吏治一」で、「光棍は則ち略

強盜に近きも盜賊たるを恥ずるなり。多くは里中の無賴の子を養育し、……其の甚だしき者は、場を開き市を趁い、聚まって賭博し、棚を分つて衆を糾め、白晝刀械を露わし、稍睚眦すれば即ち毆殺し、商販の苦しむ所たり」と光棍の生態を説明する中で、その「最も年力強暴なる者は、乃ち私販を邀遮して鬪い、其の過ぐる所の水陸を截して、規例を責取して以て常と爲す。」と述べている。これらの行爲は「一種無賴の博徒、什五相聚まり、各刀械を持って水陸の要隘に踞り、私鹽私販を率えるを藉りて名と爲し、恣意に譎索して事端を滋生す。これを路魔と謂う」と潁州府條示にあるのに當る。

この「土棍」「光棍」が捻子に外ならぬことは前述したが、彼等は清朝のために、自發的な私鹽取締に従事したのではもちろんない。密賣者側が應分の金品（規例）を差出しさえすれば文句はないのであって、さればこそ査揆も續けていつているように、「私販も亦これ（光棍）を待みて緩急を爲し、ここを以て淮泗に出入するに千里の間軸鱸銜尾し、車輛接軫するも、敢て問う者無き」状態を呈したものである。

「路魔」と「包送」とは、捻子の自然發生性からいって、最後の時期を畫されよう筈もなく、事實、潁州府條示では「一、碾子・路魔を禁ず。」と一條に括っているほどであるが、論理的に云えば、繩張りを通して私鹽から冥加金をとる對立關係から、包送・包販の共棲關係に進んだと見るべきであろう。前章に引いた潁州府の碾（捻）子の定義自體が、これを物語っている。捻子は「阜陽縣地理城地方では）捻匪・鹽梟、群を成し黨を結ぶ。」「江蘇省河北一帶……捻匪・鹽梟、毎に相勾結す」といった調子で史料上でも區別されており、決して私鹽密賣者とイークォールではなかったのであるが、私鹽の盛行こそがその成長・發展を支えた最大の經濟的基盤だったのであり、そのことはまた淮北地方の鹽政上における特殊な地位と不可分の關係にあったのである。

(45) 江地は論叢二・二三頁にこの上諭を引きながら、「私鹽經過、勒成械闘」の部分故意に省略して、「拽刀手・捻匪・紅鬍子皆由此出」と末文に直結している。この八字の有無が捻解釋に大きく響くことはいうまでもない。

(46) 前引の上諭は同時に「有恩縣著名土棍李福、不但包販私鹽、意敢窩藏賊匪」と指摘している。

(47) たとえば豫軍紀略三土匪三に「咸豐六年六月、裕州土匪李太春、張五禿、……以年荒失業起意結捻、所至訛索酒食、包送私鹽」「泌陽土匪王四老虎、有捻夥……六十一人、自爲一捻、……訛搶私鹽」と同一時點で二つの捻子が相反する行動をとっている。なお中國での研究はこの路魔的側面に全くふれていない。

(48) 十朝聖訓宣宗八〇道光二年九月乙亥條。
(49) 同上八六道光二四年三月庚辰條。

三 捻軍と宗族

私鹽は捻子にとって、單に財源としてだけでなく、受益者たる民衆との結合、捻子同志の連携の強化にも貢獻した。たとえば雒河集一帶の捻子の包送活動が、安徽北部から遠く河南・山東・江蘇北部にまで及んだ事實は、各地の捻子や私鹽業者との連絡關係なしには考えられない。また官憲の彈壓も同様の結果をもたらしたようである。捕役まで捲込んだ捻子の組織が、實質的に地方末端行政を麻痺せしめるほど強大であったにしても、清朝および地方當局はもちろん座視していたわけではなく、「若し捻を結ぶこと十人以上なる者は、爲首は斬に擬して立決し、爲従は絞監候に擬し、被脅されて同行せる者は烏魯木濟に發し官兵に

給して奴と爲す。」という一八三一年の新例をふりかざして強壓を加えた。ところがこの地方は名うての「不管地」であり、手配された捻子は、單獨もしくはグループで河南から江蘇へ、江蘇から山東、さらに安徽・湖北へと、各地の捻頭を頼って省境地帯を轉々とし、ほとぼりのさめるのを待つのである。⁽⁶⁾上から下へ體制的には完備した清朝支配も、横の連絡、協力關係の不備を衝かれては、そのもろさを暴露する外はなかった。

このような場合、各捻頭は仁義をつくしてこれを保護したようであり、本來、排他的局地的性格の捻子にも、彈壓への抵抗を通じて連帶關係が生じていったと思われる。雉河集が捻軍叛亂の最大の中心となるのも、そこが省境・鹽政共通の不管地であるばかりか、亳州・宿州・蒙城さらに阜陽の四州縣交界の地であり、三重の不管地だったことを度外視できない。恐らく各地の捻徒が手配をさせて、張樂行の許に身を寄せ、一宿一飯の恩義を受けたことが、捻子中における彼の聲價をますます高からしめ、最後には捻軍盟主へと推戴させたのであるまいか。大體、捻亂前夜においては、私鹽ルート的關係もあって、河南南部・安徽北部

の河南省境地帯・淮河沿岸・淮南とそれぞれに捻子のルーズな結合關係が成立していたように思われる。

この勢力の増大と連年の凶荒による社會不安を背景に、一八四五、四六年頃から捻子の指導する、時には千人・數千人に達する半武裝の大衆が清軍と衝突したり、官衙を襲撃する事件が各地で發生するようになる。五一年(咸豐元)には河南南陽の角子山での抗官鬭争、江蘇の捻衆による河南確山縣城占領、五二年には張樂行が衆萬餘を率いて河南永城縣城を襲うなど、兩淮一帯は物情騒然たる状態を呈する。五三年二月、太平天國軍は安慶(安徽省城)を占領、四月、定遠で陸運齡の叛亂が發生、五月、太平天國北伐部隊は揚州を出發、六月、淮北の蒙城・亳州を通過、無人の野を往くが如き勢いで河南に進軍する。清軍の無力さの露呈と太平天國軍通過の刺激によって、到るところで農民の武裝・抗官が始まり、捻子はその組織者となり、江地の所謂「捻軍期」の幕があくわけであるが、⁽⁷⁾紙幅の制約もあり、戦史は全く割愛して、ただちに捻軍の性格の考察に入らねばならない。

(6) 東捻軍の命取りとなった同治六年の山東進入の契機は鹽集の

叛亂とその應援依頼にあったらしい。(兩淮戡亂記参照)

- (61) 十朝聖訓宣宗八六道光二年一〇月巳卯條とか、同文宗九〇成豐元年六月丁丑條九一咸豐二年十二月己丑條などにその好例がみられる。

(62) 江地、論叢三〇〇三八頁参照。

「捻寇は初起に方^{あた}つては、飢窮烏合の徒に過ぎず。……

今日は散じて民と爲り、明日は復起^{また}ちて捻と爲る。」と薛福成は論じ、捻軍に捕えられて二月餘を過した柳堂は、その「蒙難追筆」の中で、「此れ生れながらにして賊たる者に非ず。飢寒に迫られしなり、飢寒に迫らるれば賊に入り、飢寒に迫られずんば賊を出ず」と述べている。一八五一年、五年と淮北は大水害に見舞われ、連年の凶荒にすでに一切の備蓄を食盡していた農民は、食を求めて流亡する外はなかった。中小の地主さえ食を缺き、人肉包子^{まんじゅう}まで現れたというから、その惨状は想像を絶する。「故に賊の至る所、旌旗野に徧く、塵霾^{おほ}天を障い、人千・萬を以ては計^{かぞ}う可からず。然れども並^たえて利刃は無く、大半は飢民聚^あつて食を謀るのみ」と柳堂が述べているように、餓死を目前にした農民達が、私鹽宰領で經驗を積んだ捻子の下に結集し、富裕な地主、都市、非凶荒地區に對する掠奪行に出かけたの

が、その原初形態だったのである。

各地の捻軍の中で最も強力であり、また最も典型的な發展を見せた、張樂行麾下の雉河集集團の場合も、村ぐるみ・地域ぐるみの性格が強く、先述したこの地方の宗族遺制の強固な殘存を反映して、必然的に宗族間の自然的結合という組織構成をとっていることが注目される。清軍や河南團練との交戦を通じて、一八五五年秋、雉河集一帯の捻頭の大團結が實現して張樂行が盟主に推され、捻軍はようやくその反清の姿勢を明らかにした。^{相(1)}同時に黃・白・紅・藍・黒の五「總旗」を設け、多少とも軍制を整備したのであるが、各總旗頭は何れも大族の出身であり、その下の「大旗」「小旗」は、そのほとんどが宗族によって系列化されていた。

盟主であると同時に黃旗總旗頭を兼ねた張樂行は「九里十八張」と號する大族の出であり、黃旗の成員はすべて張姓であった外、藍旗韓老萬(一族は五ヶ村)をやや例外として、紅旗侯士維の一族數千、白旗龔得の「九里十三龔」・同族三・四千、黑旗蘇天福の同族數萬など、いずれも豪族の出身であった。各旗への外省・外地人の参加・投入は決

して少なくともなかったが、その基幹部隊は同族人であり、

同族の大小が各旗の勢力を左右する決定的要素となつたのである。宗族⁽⁶⁰⁾的結集が如何に徹底していたかを示すものは、吳・侯兩姓數十戸から成る吳土樓という小村落に二人の小旗頭があつたという例であらう。普通は一村一姓であり、一小旗頭がこれを率いるのだが、侯姓は當然同族の紅旗侯士維の下に入り、吳姓は黃旗の中に親戚があるため、黃旗に参加したからに外ならない。さらに云えば、張樂行と侯士維、蘇天福、楊興泰（五旗の外に八花旗を建てた人物）、楊興泰と劉狗（後出）とは、いずれも親戚關係にあったと傳えられるから、雉河集捻軍の大連盟自體が、血縁・姻縁（當然地縁も含む）といった自然的結合を紐帶として實現したものと云えるであらう。

(63) 庸齋外編二「治捻寇」（捻軍第一冊三五七—三五九頁）

(64) 咸豐八年の體驗を記したもの。（捻軍第一冊三四八—三五五頁）

(65) 以下特に註記せぬかぎり、「捻軍史特輯」各篇に據る。

(66) 後、他に八卦旗、花旗綠旗などが生れた。

(67) 大旗頭劉狗は義門集を根據としたが、彼自身山東から移つて來た搬運工人（苦力？）であり、その麾下にも搬運工人が多かつたという。義門集は大きな町であり、その附近には大族

がなかつたことが、彼の據頭の原因かと考えられる。

このような捻軍の性格は、組織上のルーズさだけでなく、同族聚居の關係上、地域的な分立・割據狀態をもたらした。大旗頭單位でそれぞれ繩張りを持ち、「圩寨」を築いて據っていたため、あたかも多くの獨立小王國の觀を呈した。調査によれば、現在の渦陽縣だけで氏名の確實な大旗頭だけで四五人いたと云う。五旗成立後もその統屬關係は固定したものではなく、それぞれ「領旗」と呼ばれる方法⁽⁶⁸⁾で、他の大旗あるいは小旗を系列化し、自由にその勢力を擴大し得たので、後には各旗勢力の大きな變動を生じた。雉河集一帯の中心部にあつた黃・紅兩總旗が頭打ちした反面、周邊部に位置した、たとえば白旗は西南に伸びて阜陽・潁上一帶をその勢力範圍に収め、藍旗は東南に向かつて懷遠・宿州・靈璧・五河の邊境に達し、黑旗は北と西へその勢力を發展させた。また大旗頭の中には藍旗所屬の鹿利科、白旗の孫葵心、黑旗の劉狗のように、所屬總旗頭の勢力をしのぎ、獨立作戰の能力を備え、別格扱いされるものすら現われたのである。

盟主張樂行と各總旗頭の間にも組織上の統屬關係はなく

各總旗は、黃・紅兩旗が常に共同行動をとった以外は、それぞれ獨自行動した。五五年に反清の旗幟を鮮明にしたと云っても、六三年までは捻軍の軍事行動の主要な目的は、生活手段、とくに食糧の獲得にあり、飢餓が迫ると大趙主（總旗頭）の號令によって、各趙主（大旗頭）・小趙主（小旗頭）は、參加希望者を統率して——裝旗という——「打糧」に出撃する。累戦の結果「囊橐充裕」すれば引揚げて「解散・歸農」し、食が盡くればまた出撃するといった状態を續けた。獲物は馬兵二、歩兵一の原則で分たれたが、同時に參加不可能の老幼婦女にも配分されたという事實は、共同體的規制の強固さを示す好例であろう。捻軍のかかる半農半兵の性格は、一面その鬪争の強靱さの根源であったが、同時にその無組織性と相まって、軍事行動を制約し、清軍や團練の各個撃破の好餌とさせるものだったことは云うまでもない。

だが捻軍にとって最も致命的だったことは、宗族・地域の制約をこえて農民を結集する革命的綱領、政治目標を持たなかったことである。張樂行のスローガンは「替天行道」「殺富濟貧」という水滸傳もどきのものであり、他處では

「齊天大聖」（つまり孫悟空のこと）といった旗號さえ現われた例があるが、中國の歴代の農民戦争に共通する「均産」の要求は全く提起さえされていない。これは組織者たる捻子の性格およびその背景である宗族遺制と關係する。前に「賊の強悍にして富める者、自ら首領と爲る」という馬杏逸の言葉を引いたが、張樂行の場合を見ると、彼の手下「一八打手」達はいずれも貧農・小作の出身であるに拘らず、彼自身は小地主（一四〇〜一五〇畝）の家の出であった。兄弟三人の中、長兄は小地主の叔父（一一〇畝）を出繼し、捻軍旗頭の一人である次兄張敏行は、析産後買足して五〇畝の地主となっており、彼自身は七〇畝餘の富農の地位を維持していた。さらに彼を一廉の「光棍」にまで引立ててくれた張老家村内の光棍張光照は三〇〇畝の地主であった。他の領袖達も多くが豪家の出身者だと思われるが、捻軍が他族・他地域の地主・豪紳を打撃しても、自族や自地域の地主・豪紳とは友誼的關係を結んでいた事實も、この捻頭の階級的出自・宗族共同體（血縁擬制）によつて説明できるのではなからうか。

⑤ 江地、論叢七五頁參照。

(59) その中の張徳才は樂行とは同族ではなく、張老家村内の地主の家の長工だった。(彼の父はもと袁姓の地主の保鏢だったのが張老家に引抜かれたという。一八打手中、張以外の姓が数人いるが、恐らく同様に張姓に附した佃戸或いは雇農だったと思われる。)

(60) 江地、論叢八一頁参照。

さらに問題となるのは、捻軍蜂起の契機やその後の各地の團練との激闘に、多分に械鬪的要因が絡んでいることである。⁽⁶¹⁾雉河集捻軍の大同團結に、河南省の永城縣など數縣の團練との地域械鬪的抗爭が促進契機となつたことは江池も認めているが、私はさらに鳳臺縣を中心に勢力を張つた苗沛霖の團練との激烈な對立・戰闘にも兩地間の械鬪的性格を認めざるを得ない。捻軍が窮乏地域における地主・農民諸階層の「打糧」統一行動の性格をもつ以上、被進攻地域の地主・豪紳が「家鄉保衛」をスローガンに、貧窮同族人を團練に結集することは容易だつたし、かかる團練の報復攻撃に遭う雉河集一帯の住民が、さらに地域ぐるみの結集を強化したのは當然であらう。

捻軍の中に牢固として存在した宗族觀念と地域主義は、このように地域械鬪の中に事態の階級の本質を見失わせた

だけでなく、捻軍内部にまで各旗相互の利己主義・排他主義を持込み、その無統制と分裂を助長するものであつた。

捻軍同志の互闘互殺事件が少なからず發生したこと、領袖連の中から裏切者や投降者が意外なほど多く出ている事實は、これを物語るものであらう。また一八六一年、壽州の土豪的團練の指導者孫家泰⁽⁶²⁾と苗沛霖の抗爭の際、一部の捻軍が孫家泰に招かれ、應援のため所もあらうにも安徽巡撫翁同書の座城、壽州へ入城したことや、一八六五年、札付きの裏切者李兆壽(世忠、河南固始の人)の下に、捻軍の錚錚たる領袖達が避難して捕えられたことなど、⁽⁶³⁾捻子時代の性格が、叛亂期を通じて基本的には依然として貫徹していたことを示している。

最後に前述の一切と關連して來る問題は、捻頭の土豪的性格である。一般に後進的宗族遺制は土豪發生の絶好の温床であり、事實、咸豐年間の兩淮一帯は、動亂の中で土豪連が群雄割據し、一種の戰國時代を現出したのであるが、捻軍に關する官・紳側の記述には、捻頭を土豪としてとらえているものが多い。先述した捻頭の「響老」的性格、「强悍にして富める者」という規定、張樂行およびその周

團の檢軍旗頭の階級的出自、さらには檢軍の性格上彼等が當然族中の有力者であつたことなど併せ考慮すれば、彼等が所謂土豪と見なされやすいことは首肯できよう。⁽⁶¹⁾

私は土豪を「直接の暴力を含めた經濟外的強制力によつて、地域的に勢力を張るもの」と規定しているが、農奴主的・家内奴隸主的地主として、彼等は支配體制の下部に重要な地位を占めつつ、同時にその封建的支配維持のため、專制權力貫徹の對立物に轉ずる、アウト・ロウ（無法者）の性格をも兼ね備えた複雑な性格をもつものである。中國の專制支配は在地の地主權力と相補代位の關係にあり、國家權力の弛緩・後退の際は、在地の地主勢力が直接的武裝形態をもつて、支配の維持を圖るのが常であつて、とくに動亂の場合にそれが顯著に現れるのだが、それは同時に中國舊社會に内包している封建的割據傾向の顯在化でもある。⁽⁶²⁾

團練の練長として勢力を張り、「圩を連ぬること數千、衆數十萬、訟獄は大小皆口決し、縣令は符璽を守るのみ」といわれ、關稅徵收權、鹽販賣權を清朝から強取し、軍閥小王國を實質上實現して、あわよくば亂世の英雄たらんとした鳳臺の文生苗沛霖など、兩淮におけるその典型である

が、この地方の土豪達は、あるいは檢軍に加わり、あるいは首鼠兩端を持し、あるいは清朝に加擔するの差異はあつても、ほとんど例外なしに封建的獨立・割據の傾向を示したのである。⁽⁶³⁾ 檢軍の場合も、その内容の正確な理解のためには、かかる要因も當然考慮されるべきであろう。

(61) 定遠の陸退齡の叛亂も、同地の大族方氏との抗争が契機となつてゐる。陳作霖、可園文存一、「金剛愍公傳」（別集八三頁）參照。

(62) 江地、論叢七九―八二頁參照。

(63) 員外郎。孫氏は族中から孫家廟を出している名族である。

(64) 同治六年、雒河集檢軍の大旗頭李允が逃投して逮捕された。

史念祖、毀園隨筆「生擒李允安徽肅清記略」（別集三三二―三三五）參照。

(65) 他に藍旗大旗頭の李勤邦（後投降）は大地主であつたことが明らかにされている。なお檢軍中に少數だが武舉、武生、監生などがいたことは江地、論叢二八―三〇頁參照。

(66) 太平天國後の督撫專制・分權化の傾向の基礎にはこれがある。拙稿「淮軍の基本的性格をめぐって」歴史學研究二四五號參照。

しかし、それでは、張樂行・任柱・張宗禹など、最後まで飢餓農民の先頭に立つて闘い、節を曲げなかつた檢軍の領袖達をどう評價するのか。張樂行の率いる雒河集檢軍の

一部が、主力とは分かれて、一八五八〜六一年まで淮南にあり、太平天國軍と相呼應する作戰を行つたこと、張樂行が五九年頃、「封を聴くも調^{めいじ}は聴かず」の條件付ではあつたが、太平天國の「征北主將鼎天福」の封號を受け、六一年末か翌年初には「沃王」に封ぜられたこと、さらに彼の被害後、六四年に張宗禹・任柱等の捻軍が、太平天國の殘軍、遵王賴文光等と完全に合體し、その覆滅にいたるまでの四年間、凄まじい運動戰を展開して、その棹尾を飾つた事實と、私がこれまで強調した捻軍の宗族的排他性、地域主義とをどう結びつけるのか。

これについては、兩者の相互利用とか、六二年から六三年にかけて、僧格林沁軍の洋式大砲で雉河集一帯の圩寨群を潰され、太平天國滅亡後にわかに増大した清軍の壓力と相まつて、歸るべき根據地・家郷を失なつたことによる必然的歸結とか、いろいろに解釋できよう。だが私は基本的には飢餓農民の革命的昂揚に支えられた領袖達が、清軍や地主團練との戦いを通じて、それらの偏向を克服し、成長した結果だと考えたい。宗族遺制に依據し利用する者は、同時に宗族大衆の動向に規制される。最も極端な飢餓に迫

られ、團練や清軍の殘忍非道な武力彈壓に對する仇恨に激發された同族・地域の貧窮農民のエネルギーこそが、彼等を指導者として押上げ、文字通り「行俠尚義」「替天行道」「滅富濟貧」の英雄を成就させた原動力だつたのである。

北村敬直氏は、その論考「清代の械鬭」(史林三三〇一)の中で、王志伊の所論を紹介しつつ、宗族遺制の強固な地方では、「各郷邑が械鬭して互いに仇殺しあうために、大地域にわたつて連合することができ難いから」、支配機構への反抗を意圖する祕密結社(會黨)が伸び悩む。械鬭は「逆」(叛亂)の發展を阻止する、つまり「逆」と正反對の方向に作用する「歴史的役割」をもつていたと指摘されている。事實、いかに宗族遺制、地域主義、械鬭が捻軍の發展を制約し、階級鬭争の正常な發展を阻害したかは、これまで縷述したところによつて明らかであろう。^{補(6)}

だが宗族的制約の中で歪められ、屈折しつつも階級的契機は貫徹せずにはいない。もしも元末のこの地方におけるが如く、白蓮教が、宗族・地域の制約をこえて、農民を集めることができたならば、叛亂の様相はかなり違つたものとなつたであろう。しかし、白蓮教がその役割を果し得

ぬ状況の下では、飢餓農民達はその對立物でさえあり、かつて「邪匪」(白蓮教)とではその危険性は段ちがいだと清朝に多寡をくくらせていた捻子を、これだけの大叛亂の組織者に育てあげ、清朝に大打撃を與え得たのである。

當時、合肥で豪族團練を指揮していた土豪の周盛傳は、太平天國軍や叛亂土民の猛攻に遭つて動搖する同族の農民の士氣を鼓舞するために、鉛を銀と偽つて懸賞にかけたと述懐している。これは「匪徒——失うべき何物をも持たぬ貧窮農民——は、往々捻匪將に至らんとするを聞くや、竟に自ら其の親屬を殺し、自ら其の居處を焚いて以てこれに従う者あり。欣々自得、恍として拔宅飛昇するが如し。」という捻軍に對する農民の姿勢と全く好對象と云わねばならぬ。我々は官府文書が「脅從」と誣稱する捻軍大衆の中に、自から共同體的規制を打破つて飛びこんで來た農民達の大群を見出し得る。宗族遺制はどんなに強固であつても、階級的契機の貫徹を阻み得るほど萬能ではなかつたのである。

(88) 周武壯公遺書卷首「自訂年譜」咸豐十一年條。

(89) 楊積中、續纂寇略中(別集一二八頁)、なお農民が「圩破之

後、從之(捻)如歸」といった類の記述は多くの史料に見うけられる。

むすび

十數年間にわたる戰亂の中で、とくに僧格林沁を筆頭とする清軍の三光(殺光・略光・燒光)政策によつて、安徽北部の人口は激減した。多くの土地は荒蕪し、野には野生化した農作物が多く、袋一杯ぐらいの食物はすぐ採集できたと古老は語っている。階級的な矛盾はある程度緩和され、革命的士氣は低下し、農民の一部には叛亂の繼續を願わぬ空氣があつたという。雉河集根據地潰滅當時の情況である。淮北地方における社會矛盾の農民戰爭という形での自律的調整は一段落し、新たな矛盾の再生産過程が進行を開始するのである。以後の淮北地方は、淮軍の募兵地となり、安徽軍閥の根據地となつて、農村の後進性を背景に、むしろ反動的な役割を多く分擔するようになる。

同時期の太平天國革命に對比して、捻軍がかくも異質であり、立ちおくれた原因は、やはり兩淮と華中・華南との經濟的・社會的地域差に求めねばならない。太平天國

革命展開の基盤となつた、華中・華南の三合會・天地會などの所謂「會黨」は、赤の他人でも結盟を経れば同生共死の兄弟だという發想から出發しており、地理的制約を克服して廣汎な結集を圖り得る組織形態であつたのに對し、兩淮では強固な宗族遺制の存在、つまり血縁以外の結合關係が考えられぬという歴史的制約が、捻子なる反體制的集團群を産み出したのである。おそらく嘉慶の大叛亂の敗北による打撃から立直れずに、白蓮教が農民戰爭の組織者たる歴史的條件を缺いていた當時の兩淮にあつては、捻子・捻軍の結集以外に農民には方法がなかつた。そこにこそ捻軍の革命性の根源があり、同時にその限界もあつたと云わねばならない。

補1 捻軍には當初明確な反清意識はなく、この時彼等が「大漢國」を建て、張が「大漢盟主」「大漢明命王」と號したとする一部の記載は全くの誤傳だと調査報告は否定している。縣官の張樂行誘殺の陰謀、河南圍練の雉河集攻撃などにより、所謂「官逼民反」の立場に追込まれたのであるが、彼等が公然たる叛亂に踏み切つたのには、太平天國の勢威上昇と清朝の弱體暴露が相當影響したと考えられる。

補2 總旗または大旗が自己の旗を他捻に授與して統屬關係を明

かにする方式である。

補3 趙主は各史料では堂主と誤寫または誤認され、白蓮教と捻との關係を臆測させる一因となっている。

補4 地主も貧農も同じく宗族共同體の成員として一括され、他宗族との對立意識が連帶性を支え、加えて地主層のイニシアティブが確立していた以上、均産といった極めて階級的な要求は、捻子においては提起されうべくもなかつた。論叢一一七、一一八、一七七―一八四頁參照。

補5 約七〇年後、中共は捻分布地域の西部で農民運動を展開、鄂予皖ソウェト區を建設するが、それは宗族遺制との徹底的な對決を通じてかちとられたものであつた。

附記 太平天國の革命的禁欲主義とは對照的に、張樂行・張宗禹など捻軍の領袖達には阿片吸飲者の多かつたことを示す史料は少なくなく、捻子の性格としてもそれは十分ありうることである。一方、採集された捻軍民歌や張樂行布告の類には、豪富に對する貧民の勝利を謳い、憎惡を示し、あるいは他族・他地域の貧民の保護を説いて、捻軍の農民戰爭性を如實に示すものがある。この兩側面をどう統一して把握するか、これが小論の課題であつたが、紙幅の制約もあり、中國側の研究で輕視されている側面を強調するに急で、必ずしも十分に意をつくせなかつたのは遺憾である。また當然ふれるべくしてふれえなかつた河南の連莊會、山東の宋景詩軍・白蓮教軍などについては他日に期したいと思う。なお安徽史學通訊は我國では非常に入手困難な雜誌であるが、私は日中友好協會京都府連所藏のものを利用した。

On the Origin of the *Ch'ing-miao-fa* 青苗法

Yasushi Kusano

Since the merchants practiced the cornering of cereals, boosted the prices and sold at high prices to the government, the northern Sung dynasty faced a difficult financial problem to supply its army with provisions. Consequently, the government attempted to control the merchants first by means of prohibiting commercial transactions during the period of government purchasing and buying from the farmers. This policy proved a failure because of the merchants' advance purchase in the form of loans to the producers. The *ch'ing-miao-fa* system, which was no less than government advance buying, was brought into practice to cure this difficulty.

A Sidelight on Islamic Financiers, especially the *Jahbadh*

Syôkô Okazaki

The author tries to make clear the nature of the *jahbadh* system, which has been little explored because of its complicated character. The term *jahbadh* is a derivative from the Persian *kihbad*, and seems to have appeared about the tenth century. The *jahbadh* was a kind of licensed financial agent whose business was to collect taxes, remit government funds, loan to the caliphate, etc. and in return he was granted some privileges. This system came into existence as a result of confused local currency and different purities of precious metals, developing into a politico-financial organization with the progress of the deterioration of the financial system.

The *Nien-tzu* 捻子 and the *Nien* Rebellion 捻軍

Sinji Ono

The *Nien-tzu* organization, which was the core of the *Nien-tzu* Rebellion (1853-68), was not a simple secret society affiliated with the

Pai-lien-chiao 白蓮教 religion, as often said, but a spontaneous association of outlaws. It sprang up as a result of the then prevailing agrarian distress and intensified social stratification in the Huai-ho region, while illicit traffic in salt constituted the organization's financial background. The failure of the movement was largely due to its narrow regionalism and clan-like exclusiveness which prevented unity within the organization. But in some uncompromising leaders (*nien-t'ou*) such as *Chang Lo-hsing* 張樂行 we find the true nature of the movement as a peasant war.

***K'o* 課 and 稅 *Shui* Taxes in a Tax Register of Western Wei**

Genyū Nishimura

There appears the name of a household headed by a man called Liu Wên-ch'êng in the document No. 613 discovered at T'un-huang by Sir Aurel Stein. This household is classified as a *k'o-hu* 課戶, a technical term in the contemporaneous taxation terminology, while each member of the household is registered as *pu-k'o-k'ou* 不課口. The document tells us that Liu Wên-ch'êng and his wife were a *t'ai-tzu* 臺資 and a *t'ai-tzu-ch'i* 臺資妻, respectively; these names indicate that the Liu household was a *pu-k'o-hu* which was to pay a special kind of tax called *t'ai-tzu-ting-ch'uang-shui-tzu* 臺資丁床稅租. However, in fact the Lius paid the full amount of *shui* (pu-ma-tsu 布麻租) like a *k'o-k'ou* but not *shui-tsu*, and, consequently, their household was called a *k'o-hu*. Why? Liu, a *t'ai-tzu*, who was to be employed for *tsa-jên-i* 雜任役, a sort of clerical work, was still free from the job at the time of making of the tax register. It seems that at that time he paid four *shih* 石 of *tsu* instead of one; he must have paid the excess three *shih* as his *tsu-k'o* 資課 in place of being employed in the *tsa-jên-i* service.